第13回特別展

礫石経

立正大学博物館

ごあいさつ

礫石経は、紙本経の経塚が激減したのちも引き続き造営され続け、稀には現在でも造営されることがある。造営目的は、経塚本来の弥勒説法の時までの経典保存から逸脱し、現世利益や追善供養になってしまったが、その反面民俗的な生活文化にすっかりなじんだといえる。現在において、経塚を考えるとすれば、まず礫石経を取り上げねばなるまい。

しかし、礫石経の研究は、紙本経に比して著しく遅れており、いまだ資料的にも不十分な状態に置かれている。紙本経の経塚の出土品は、見た目も華やかなものが多く、副納品も豊富である。そのため、国宝や重要文化財に指定されているものさえあり、博物館で展示される機会も多い。それに対して、礫石経は、見た目も地味で、副納品はほとんどない。展示しても見栄えがしないので、博物館でも敬遠され勝ちである。

このような礫石経であるが、そこに籠められた信仰と歴史を解読する作業は、まさに仏教考古学の格好な課題といわねばならない。仏教考古学の専門館である立正大学博物館としては、かねてから礫石経を展示し、それを機会に研究を推進しようと考えていた。

そんな折、図らずも山口県下関市の熊野譲氏から 29 点の礫石経をご寄贈いただき（内 1 点寄託）、またとない礫石経研究推進の好機を迎えることができたのは思いもよらない僥倖であった。心より感謝申し上げるしだいである。

この好機を研究者だけのものにしてはならないと考え、ここに「礫石経」展を開催し、新資料である熊野家墓所出土礫石経を広く公開したいと考えた。あわせて、関連資料を紹介し、礫石経について考える機会としたい。多くの方のご観覧を請うしだいである。

平成 30 年 2 月吉日

立正大学博物館長　時枝　務

目次

ごあいさつ／目次／凡例
1.　礫石経とは……3
2.　礫石経の時空……5
3.　資料紹介……8

凡例

（1）本図録は、第 13 回特別展「礫石経」の展示図録として作成した。

（2）本図録の作成は、館長時枝務のもと吉水美紗登が編集し、実測図の作成及び資料写真の撮影は本間奈緒子（当館非常勤学芸員）が担当した。

（3）本図録に用いた挿図の出典及び引用・参考した文献は巻末に掲げた。

【表紙】
左下：熊野家墓所出土礫石経（No. 27）
右側：熊野家墓所出土礫石経（No. 1）経文拡大

1．礫石経とは

■　研究のあゆみ

礫石経の研究は明治時代に始まった。明治35年（1902）、和田千吉（1871～1945）は、「経文埋没の種類と其の主意」を『考古界』1巻8号に発表し、一字一石経が経塚の1類型であると主張した。当時、各地で一字一石経が発見され、報告が相次いだことを背景にまとめられた論文で、一字一石経を経塚の範疇で理解した点が重要である。

立正大学で教鞭をとった石田茂作（1894～1977）は経塚研究を体系化した研究者であるが、その著書『経塚』（考古学講座、雄山閣、1929・30年）で「一石経」は「藤原期の埋経と同一視できないものであり、その起源については笹塔婆、柿経などに求められ、追善を目的として行われた功徳行の一形式」であると説いた。経塚には、埋経と一石経という異なった形態があり、それぞれ性格を異にするというのである。埋経の経塚が経典保存を目的とするのに対して、一石経の経塚は「追善を目的として行われた功徳行」であるというのである。ただし、石田は一石経の用語を使用し、礫石経とはいっていない。

石田の高弟で、長年立正大学の非常勤講師であった三宅敏之（1923～2005）は、『新版仏教考古学講座』第6巻経典・経塚（雄山閣出版、1977年）の「経塚の遺物」「遺跡と遺構」の項目において、「礫石経」「礫石経経塚」の用語を用いた。この三宅による礫石経の使用が、礫石経という用語の初出である可能性が高い。同書の「総説」で石田は相変わらず一石経を使用しているので、礫石経は三宅が採用したことがわかる。

その後、平成6年（1994）、坂誥秀一は、立正大学の同窓に呼びかけて全国の礫石経塚を集成し、『礫石経の世界』をまとめた。この作業によって、北海道から沖縄までの礫石経塚の実態があきらかになり、礫石経研究の基礎が固められた。

石田 茂作氏

■　礫石経の概念

三宅は、『新版仏教考古学講座』第6巻経典・経塚において、礫石経を次のように規定した。

石ころに経典を書写したもので、一つの石に一字づつ書写したものが多いところから一字一石経とも呼ばれている。石ころは普通三センチ位の扁平な川原石を選んだものが多いが、山石や、また必ずしも扁平でない凹凸のある小石に書写されている例も決して少なくはない。さらに一〇センチを越える石ころを用いたり、混用した例もある。墨書と朱書の両方があり、一石に数字、あるいは数十字を書写している例もある。

この説明では、なぜ一石経ではなく、礫石経としたのかが明晰でないが、『礫石経の世界』に収められた坂誥「五　礫石経研究の展望」では、その理由が次のように述べられている。

一つの小石に経文の文字を一字宛に書写し

た「一字一石経」を「礫石経」と称するのは、以前から慣用されている「一石経」と同義語でもあるが、「礫」を「小石」の表現として理解すれば、それに「大きさ」に拘泥する必要のない「石」を加えて「“礫”“石”経」と仮に表現してみたのである。したがって、「礫石経」を「礫経」とすることも不適当ではない。要は、中国などにみられる「摩崖経」「石板経」に対し、日本独自の「小さな石（礫）に一字づつ書写された仏教的作善業」の一つの型を相対的に表現し、それを理解たらしめようと意図した称呼に過ぎない。

ここでは、第一に、石の大小に関わりなく把握する観点が提示され、従来の一石経では不十分であると暗示する。そして、第二に、中国の石経・石刻経などを射程に収めた東アジア的視野から、日本の「小さな石」に写経したという特性を表現することを意図したというのである。

■ 礫石経の特質

このように、礫石経は基本的に小石に経文を墨書ないし朱書したものであるが、片面と両面の両者がある。また、一字の場合もあれば、多字の場合もあって、意外と多様な様相をみせる。しかも、礫石経塚から出土する礫石には、経文が確認できない単なる礫石が多数含まれている。なぜ、そのような現象がみられるのかについて、あらかじめ説明しておこう。

礫石経の特質として第一に挙げられるのは、礫石経、とりわけ一字一石経においては、経典のテキストとしての意味がないことである。礫石経への経文の書写に際しては、経典を参照しつつおこなわれるが、それがばらばらの経石になった段階では、もはや経典とはいえないのである。経文の1字ごとがいかに正しくても、文章をなさない文字に、経典としての機能は期待できないのである。裏返せば、礫石経は、経文の1字ごとに、独立した聖性を見出しているのであって、いわば経文の文字への信仰に支えられているのである。礫石経の1字は、経典を象徴的に示し、独立した本尊として崇められるのである。それは呪術的な世界であり、仏教そのものとは異なる信仰である。

石田茂作博士（右）と三宅敏之先生（左）
（三宅敏之『経塚論攷』より転載）

経文の文字を書写した礫石は、その時点で、単なる礫石ではなく、聖なる存在となる。草木虫魚に仏性を認める天台本覚思想に通じる感性がそこにある。聖性を帯びた礫石経と一緒に供養した礫石は、礫石経の聖性が感染し、これまた聖なる存在となる。そもそも、石には最初から聖性があり、それを経典が引き出すだけという考え方がある。清らかな礫石は、舎利に通じる存在であるとする信仰さえ、存在した。それゆえに、礫石経塚には、経文のない聖なる礫石が、経石と混在することがあるのである。その点、礫石経は、経典としての機能を保持した紙本経と比べると、呪術的な性格が濃厚であるといえよう。

2. 礫石経の時空

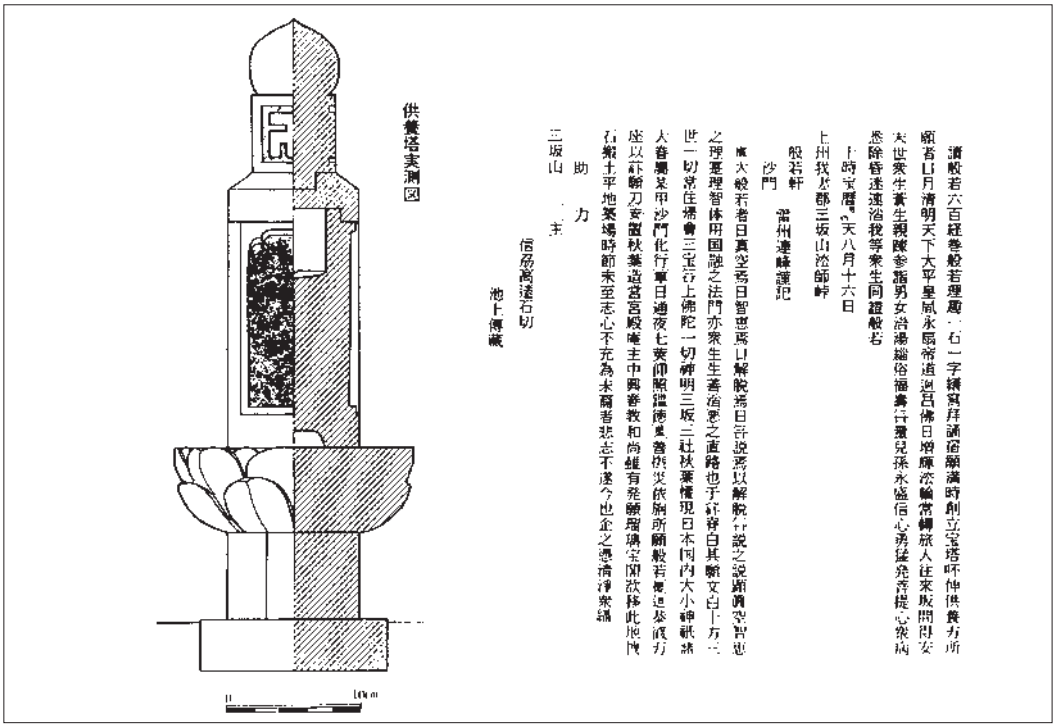
■ 礫石経の分布

礫石経は、北海道から沖縄まで、日本全国に分布する。北端の北海道では、造営年が確実なものとして、安政４年（1857）のえりも町百人浜の礫石経塚が知られているが、これより早い例もあるはずである。南端の沖縄では、造営年を特定できる例に恵まれないが、いずれも近世のものである。一見、礫石経の分布が日本の範囲と重なるようにみえるが、北海道と沖縄は近世になって加わった。中世の段階では、北海道と沖縄には経塚がなく、経塚の北限は青森、南限は鹿児島であった。

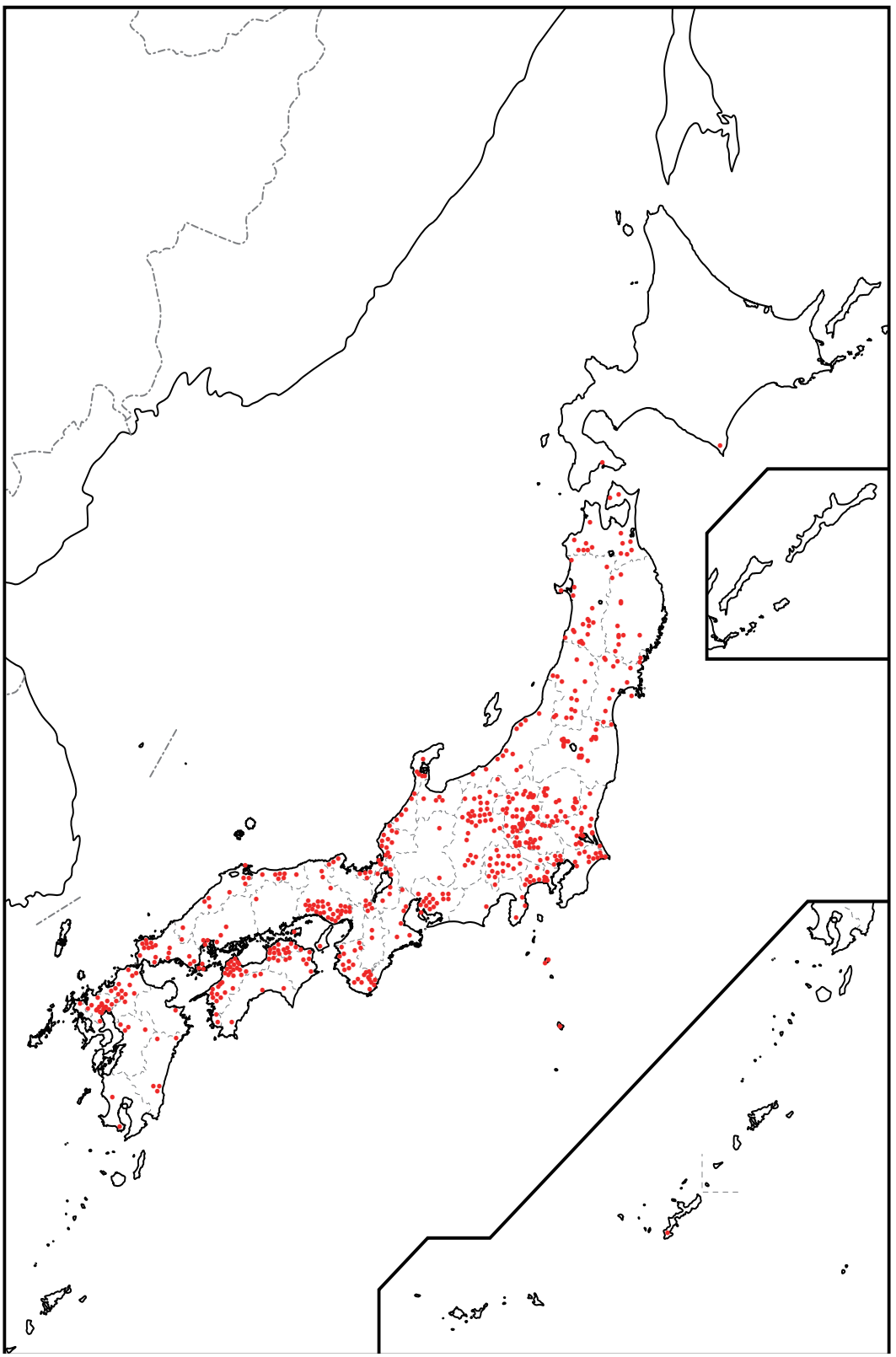
中間の東北地方から九州地方は、礫石経がごく普通に分布しており、ほとんど地域色は明瞭でなく、共通要素が多い。そのあり方は、福島県湯川村常福寺経塚のように地蔵菩薩石仏の体内に経石を収める例もあれば、同県会津坂下町中目経塚のように方形の塚を築くものもあり、その形態は千差万別である。

礫石経の経塚は、街道筋に造営されることも多く、群馬県新治村三国峠の大般若塚のように、国境を画する目的で造営された礫石経塚がある。大般若塚の場合、経碑が建つが、その地下から経石が多数出土しており、埋経の経塚の範疇で理解できる。

ところが、埼玉県飯能市宝蔵寺の例は、寺院の本堂の地下に礫石経塚が営まれており、本堂の造営に際して経塚が営まれたことが知られる。寺院に所在する経塚は、寺院創建や修築と関連するものがあり、純粋な経塚とは異なる意図で造立されたものが少なくない。



大般若塚経碑（群馬県利根郡新治村教育委員会『三国街道大般若塚発掘調査報告書』昭和 63 年より転載）



礫石経出土分布図（立正大学文学部考古学研究室 編 『礫石経の世界』 甄全舎　平成６年を基に作成）

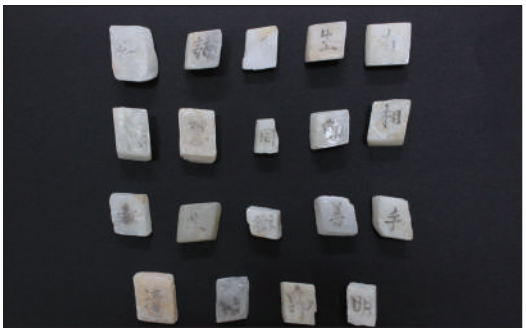
■　礫石経の変遷

礫石経の出現は、和歌山県那智勝浦町那智経塚の例など、12 世紀に遡る。しかし、それは紙本経の経塚に付随するものであって、主体となるものではなかった。それが、14 世紀になると、応長元年（1311）の山形県天童市高野坊経塚など、礫石経だけの経塚が出現する。高野坊経塚の礫石経は、いわゆる多字一石経で、一字一石経ではない。同様な経石は、長野県大町市山寺経塚や同県坂城町観音平経塚などでもみることができ、中世前期の様相を示している。

16 世紀になると、典型的な一字一石経が多数確認できるようになり、本格的な礫石経の時代を迎える。書写されたおもな経典は、紙本経の経塚と同様に法華経であるが、浄土三部経などもみられるようになる。関秀夫は、礫石経を「近世の経塚」として位置づける（『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版、1990）が、礫石経と「近世の経塚」を等式で結ぶと誤解を生じるので注意が必要である。

江戸時代は、礫石経の経塚が隆盛した時代であるが、その内容は実に変化に富むものであった。追善供養のために造営された経塚は、大部分が礫石経塚で、なかには墓坑内に経石を収めた例もある。増上寺の徳川家墓所では、方解石に経文を書写した美しい礫石経が納入されたが、それも追善供養のための作善業であろう。飢饉・津波・火山噴火などの災害に際して、僧侶による救済がなされ、多くの礫石経塚が造営された。浅間焼けの供養の場合、被災地ばかりではなく、死体が流れ着いた利根川下流の村々でも供養が執行され、礫石経塚が営まれた。また、平穏な時に造営された礫石経塚の多くは、五穀豊穣・天下泰平など、豊作と平和を祈願するものであった。三重県志摩地方では、豊漁祈願に際して、経文を墨書した経石を舟で沖合まで運び、僧侶の読経にあわせて海中に投入する儀礼が現在もおこなわれている。礫石経は、近世の間に民俗のなかに溶け込み、生活のさまざまな面において活用されるに至ったのである。

（時枝　務）



9 代将軍徳川家墓出土の礫石経
（立正大学博物館蔵）

3. 資料紹介

平成 29（2017）年 7 月 20 日、山口県下関市在住の熊野譲氏より礫石経 29 点（うち 1 点寄託）の寄贈を受け入れた。

本資料は平成 28（2016）年 3 月、山口県防府市大崎江良に所在する熊野家墓所にて墓石の整理作業の際に出土した。

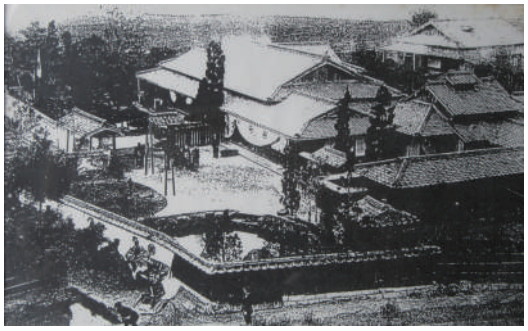
江良地区は、西目山地と楞厳寺山地の間に源をもつ須川によって形成された谷状地形と平野部が接する地域である。墓地のある弘法山は平野部から標高 28.6m の丘状の小山で、周辺には古墳が多く確認されている。

熊野家はもと大内氏の家臣でその後、毛利氏に仕えたと伝えられている。近世に入ると萩藩一門家老 2 代目当主の右田毛利元倶の家臣となる。右田毛利の家老職を務め、明治期には牟礼村外一ヶ村戸長を務めるなどしたのち没落した。没落以前は墓所のあった防府市大崎江良に居を構えていたが、その後移転している。現在、熊野家が住んでいた敷地は同じく右田毛利家に家臣として仕え、熊野家と縁続きの若月家の所有となっている。敷地内には「臥竜松」と呼ばれる県指定天然記念物のゴヨウマツが植えられている。

熊野 譲氏

寄贈された礫石経は、10 ～ 20cm の扁平な石を用い、浄土三部経の一つ無量壽經を各面を埋め尽くすように書写されている。

出土状況は、明治中頃の墓石の約 60cm 下から出土した。礫石経の下には幅 70cm ほどの板石があり、板石の下には高さ約 70cm ほどの甕が埋められていた。甕の中からは変色した布の切れ端が数点と泥状の物質が確認されたが、その後廃棄されているため詳細は不明である。



若月邸と臥竜松

寄贈された礫石経

礫石経出土地点

発見時の様子（1）
（熊野譲氏 提供）

発見時の様子（2）
（熊野譲氏 提供）

発見時の様子（3）
（熊野譲氏 提供）

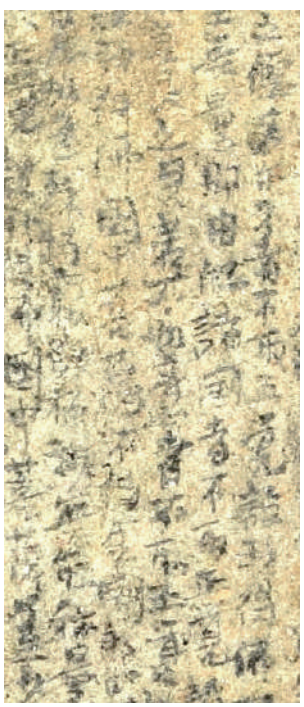
面 1

面 2

面 3

面 4

面 5



面 2 一部拡大

・・・

面 3

面 1

面 2

面 1 一部拡大

□□□□□□□慧□

生□□□□□□□□劫□

至□□□功□

土記之□□□□

径法不□□□□□□

□彼□□□□□□□不□□

礫石経（№ 4）

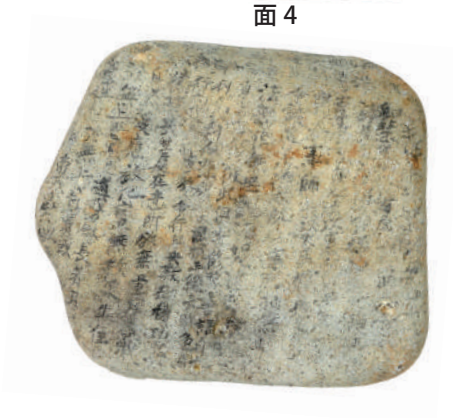
最大 12.5㎝　最大幅 19.0㎝

厚さ　2.5㎝　重さ 665g

礫の全面に墨書あり。文字の大きさは 3 ～ 5mm ほどで、際立った傾きはない。面 1、面 2 では各面 3 方向に 5 ～ 10 行ひとかたまりで経文が書写されている。面 3 では 1 方向に書写されている。

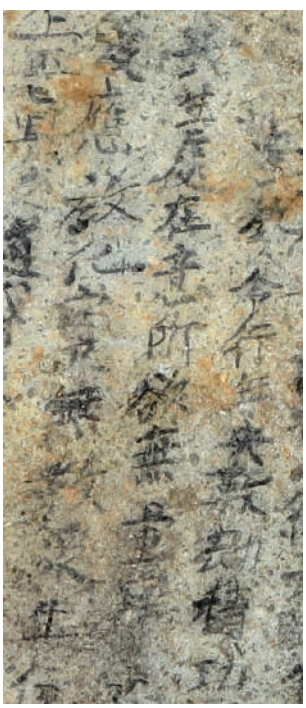
面 4

面 1



面 2

面 3



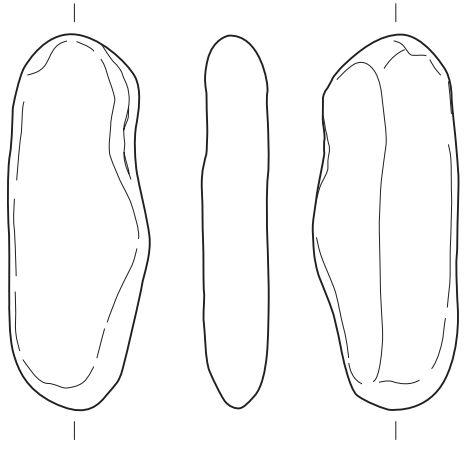
面 2 一部拡大

□□令行無央敷劫積功□□
□生□在意所欲無量□
□應放化□無数衆生□
□得□□□□不得□□□□

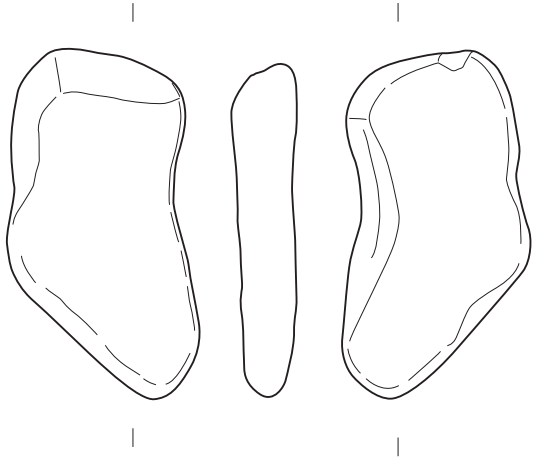
礫石経（№ 9）

最大長 8.9㎝　最大幅 10.8㎝
厚さ　2.9㎝　　重さ 470g

礫の全面に墨書あり。ただし面 3 については僅かに墨書の痕跡が認められるのみで、判読はできない。文字の大きさは 6 ～ 8mm ほどで、行は若干左に傾いている。同地出土の他の礫石経と比べ行間が 0.5 ㎝ほど空いているため一文字が明瞭である。面 2 では 170 字程の文字数が認められる。



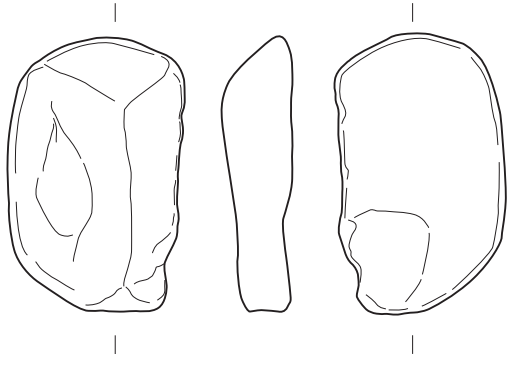
1



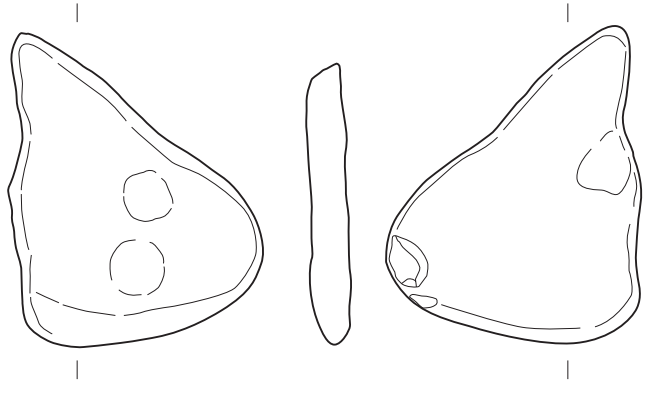
2

0 10cm
1：4

礫石経（1）



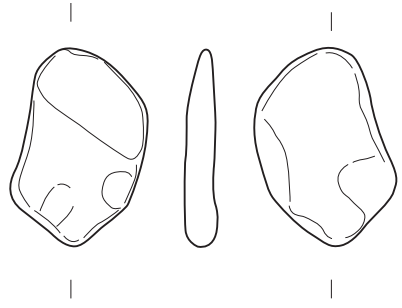
3



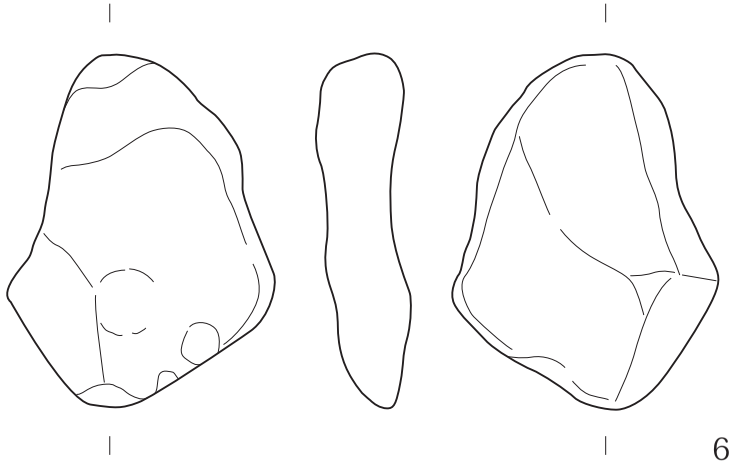
4

0 10cm
1：4

礫石経（2）



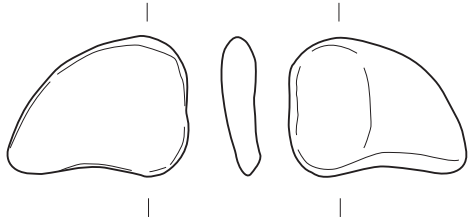
5



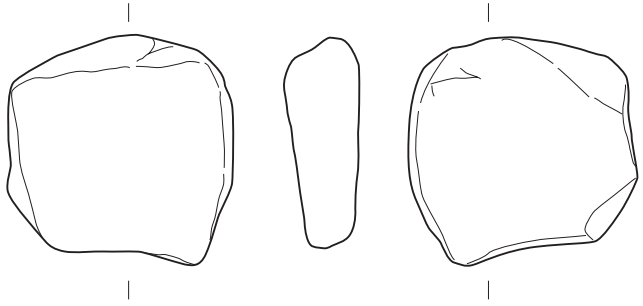
6

0 10cm
1：4

礫石経（3）



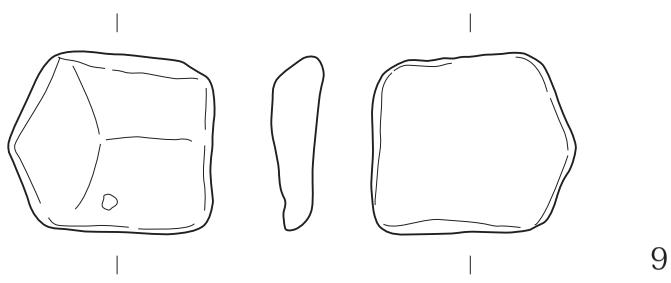
7



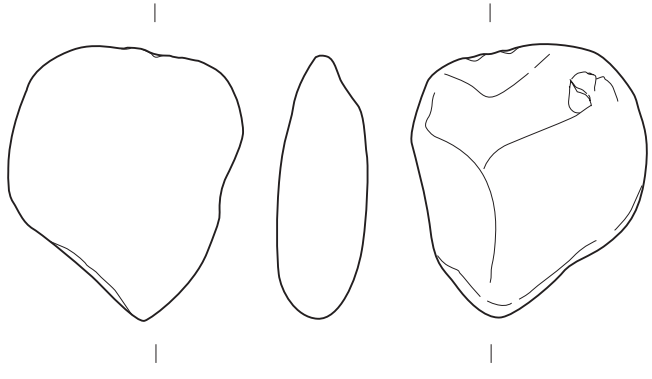
8

0 10cm
1：4

礫石経（4）



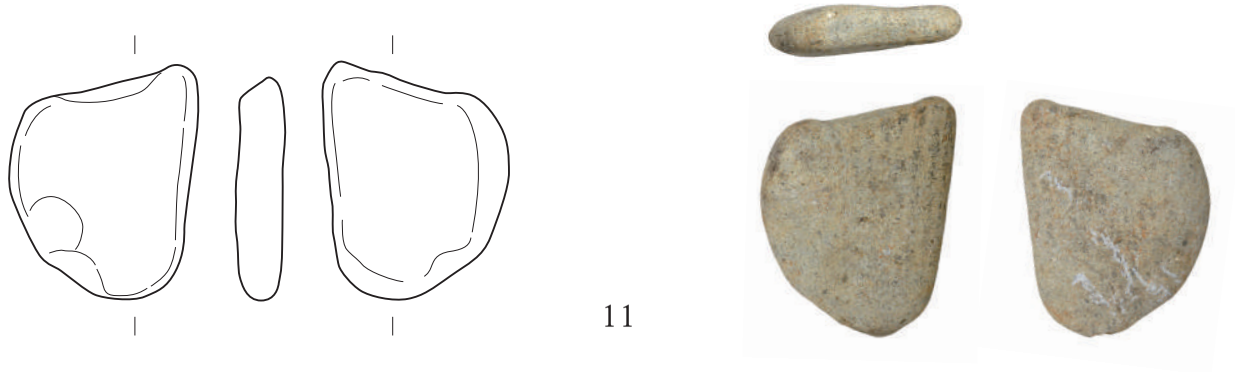
9



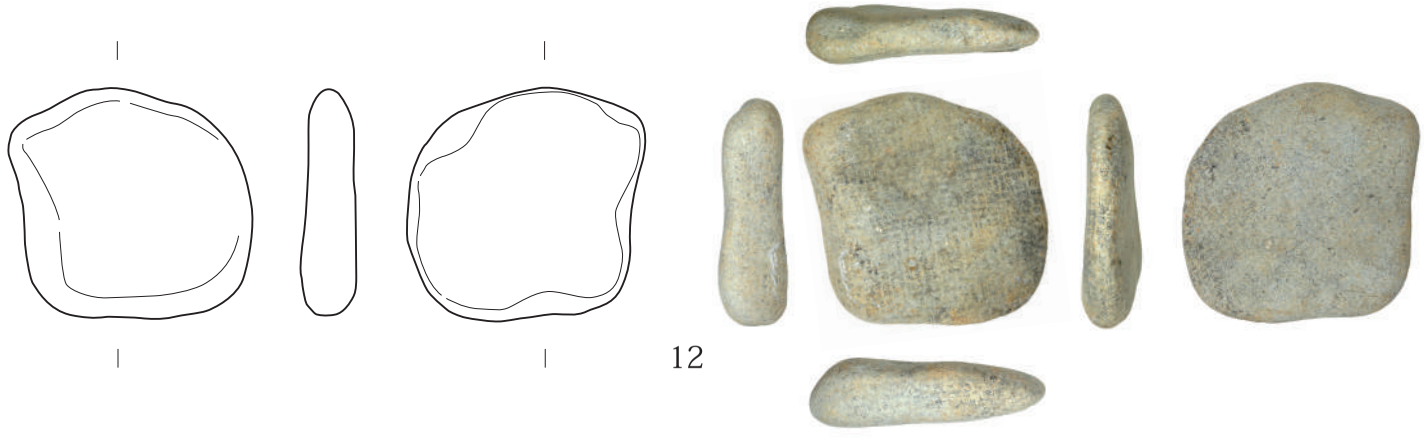
10

0 10cm
1：4

礫石経（5）



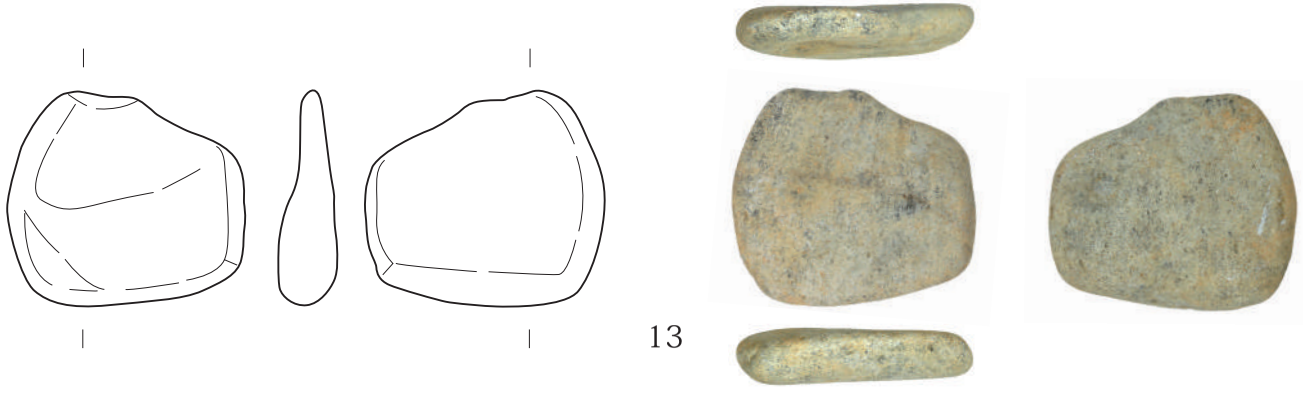
11



12

0　10cm
1：4

礫石経（6）

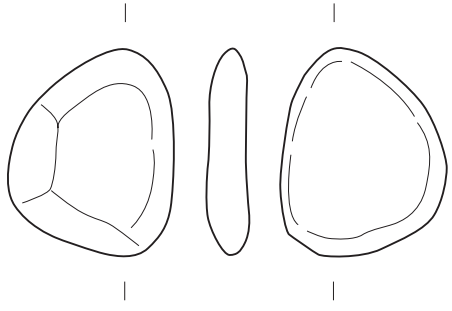


13

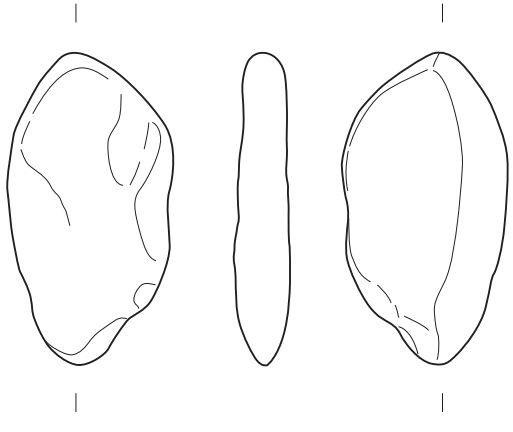
14

0　10cm
1：4

礫石経（7）



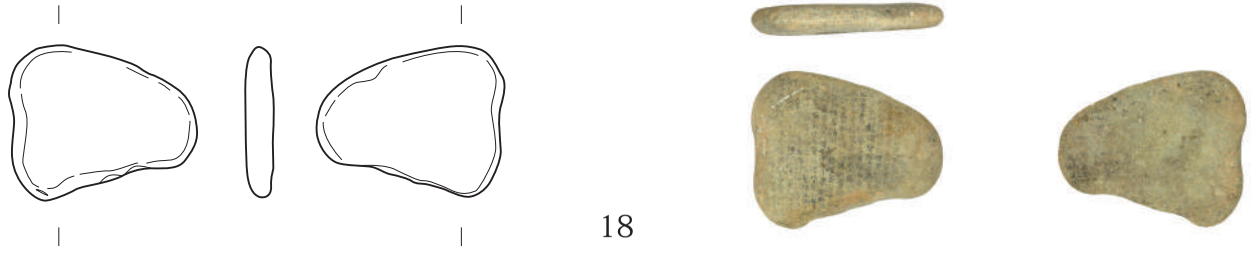
15



16

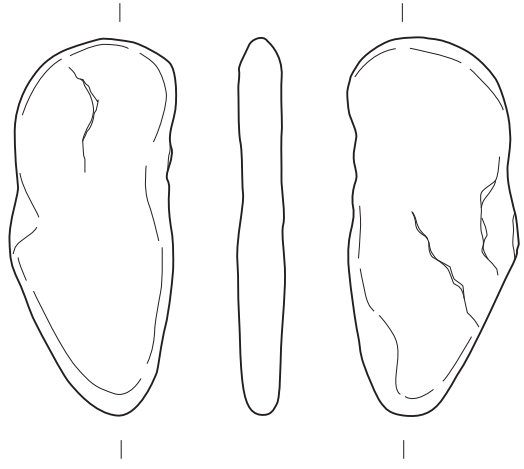
0 10cm
1：4

礫石経（8）

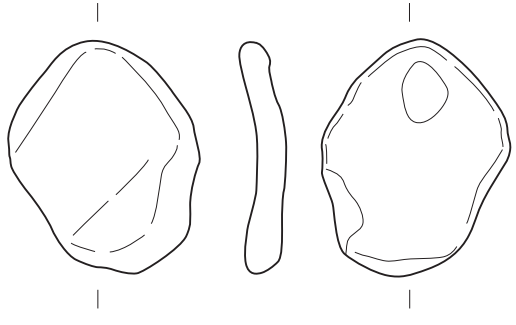


0 10cm
1：4

礫石経（9）



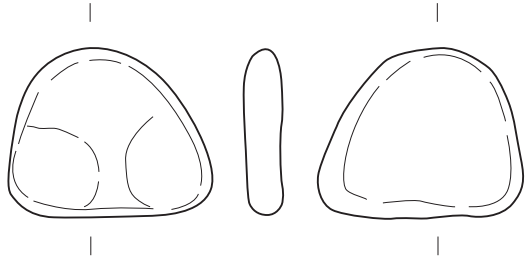
19



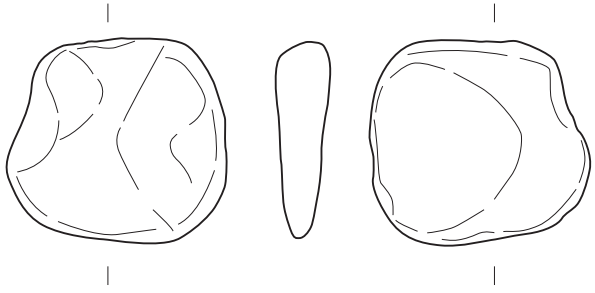
20

0 10cm
1：4

礫石経（10）



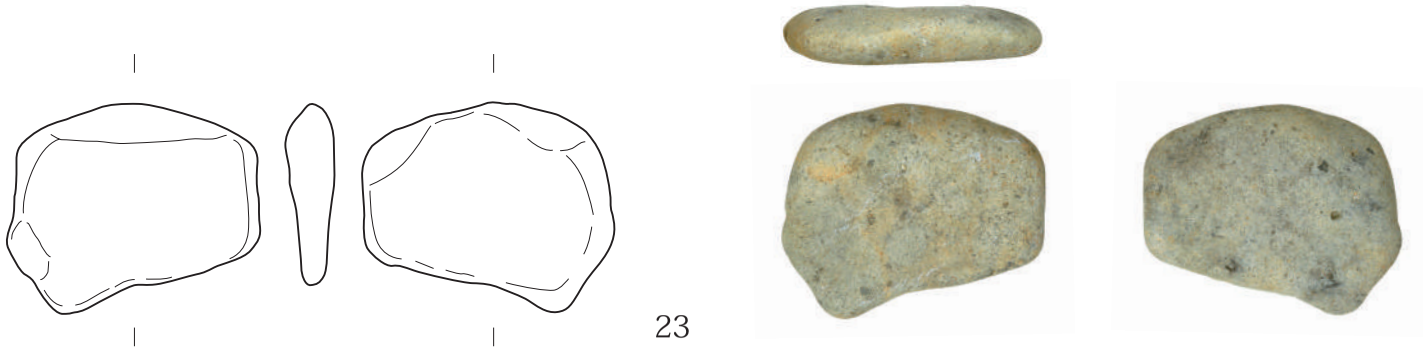
21



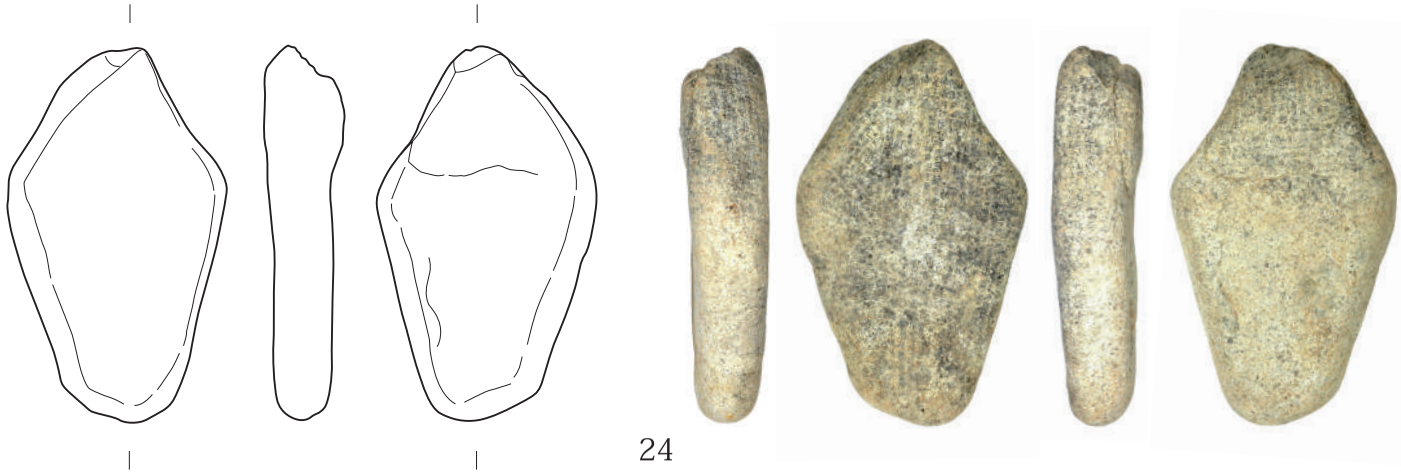
22

0 10cm
1：4

礫石経（11）



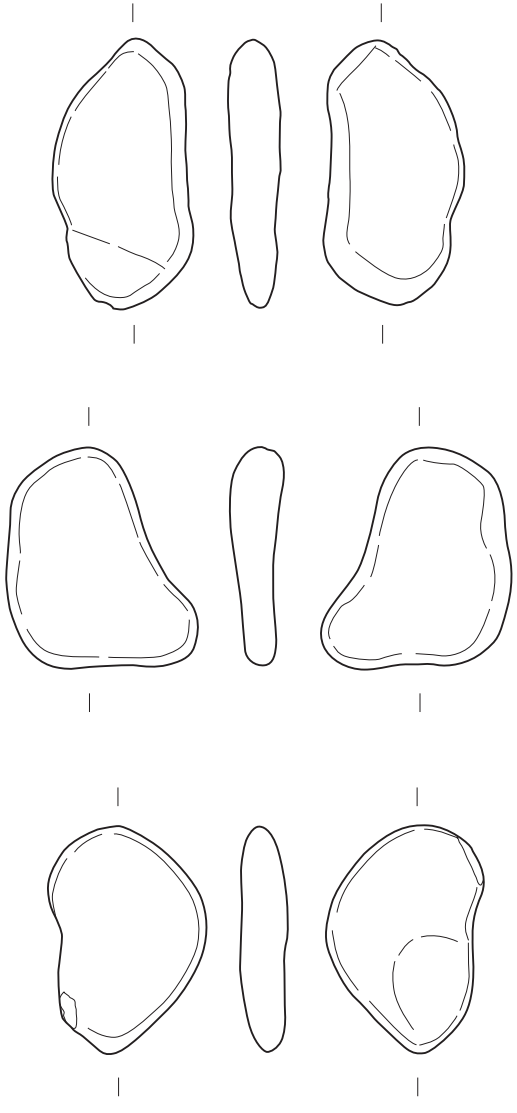
23



24

0　10cm
1：4

礫石経（12）



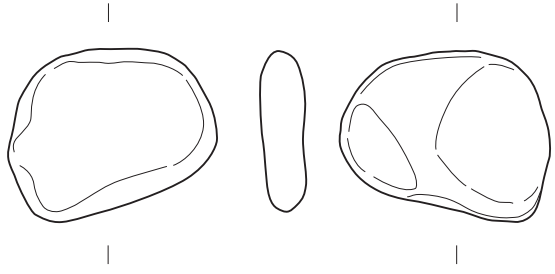
25

26

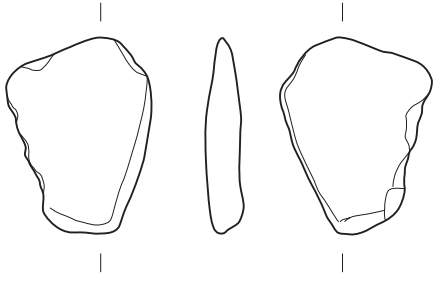
27

0 10cm
1：4

礫石経（13）



28



29

0 10cm
1：4

礫石経（14）

資料番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）
1	20.0	8.5	3.5	800
2	19.0	9.8	3.9	950
3	14.5	9.5	4.0	664
4	12.5	19.0	2.5	665
5	10.5	6.9	2.1	190
6	18.9	24.7	4.6	1055
7	7.4	9.6	2.3	190
8	11.4	11.9	4.1	915
9	8.9	10.8	2.9	470
10	14.1	13.0	4.3	985
11	12.0	10.0	2.9	490
12	12.0	12.9	3.2	735
13	11.5	12.9	3.2	600
14	9.5	11.0	1.9	355
15	11.0	9.2	2.5	300
16	16.5	9.5	3.1	575
17	9.5	12.0	2.7	545
18	8.0	9.8	1.5	200
19	19.9	8.9	2.7	590
20	12.9	10.1	2.0	345
21	9.0	11.0	2.4	365
22	11.0	11.5	2.9	510
23	9.8	14.5	3.5	635
24	21.0	12.0	4.4	1055
25	14.5	7.5	2.6	370
26	12.1	8.0	2.9	415
27	12.0	8.3	2.9	300
28	9.7	12.2	3.1	375
29	10.4	7.3	2.7	230

寄贈資料一覧

【引用・参考文献】
・石田茂作　「経塚」『考古学講座』第 20 巻　國史講習會（雄山閣）　昭和 4 年
・石田茂作　『新版仏教考古学講座　経典・経塚』　雄山閣出版　昭和 50 年
・三宅敏之　『経塚論攷』雄山閣出版　昭和 58 年
・関秀夫　『経塚』ニュー・サイエンス社　昭和 60 年
・群馬県利根郡新治村教育委員会『三国街道大般若塚発掘調査報告書』昭和 63 年
・関秀夫　『経塚の諸相とその展開』　雄山閣出版　平成 2 年
・立正大学文学部考古学研究室 編　『礫石経の世界』　甎全舎　平成 6 年
・防府市史編纂委員会『防府市史　資料 II　考古資料・文化財編』平成 16 年

【立正大学博物館第 13 回特別展】
礫石経
発行日：平成 31 年 2 月 22 日
編集・発行：立正大学博物館
〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL：048-536-6150 ／ FAX：048-536-6170
E-mail：museum@ris.ac.jp
URL：http://www.ris.ac.jp/museum/